「A History of Abstract Algebra」勉強会…第 20 回
(p35-37)
2.5 Divergence of developments in group theory 群論での歴史的な進展の分岐

様々な分野から群論は進化してきたものであるが、多様な具体的な理論を登場させた。これら*（様々な具体的な）*の理論は独立して発展した。その中には 1770 年から始まって 100 年以上もかかって発展し続けたものもある。だけどそれらも 1880 年代初期に抽象群の概念の中に収束した。抽象群論は出現し、次の 30 年から 40 年かかってまとめられた。その期間（1920 頃）の終わりに、群論がいくつかの別個の“理論”への分岐となったことが認識できる。群論でのいくつかの進歩と新しい方向の最もはっきりした説明、説明は 1920 年代から始まったが、を主要な貢献者とおよその日付で以下に記す。:
（a）有限群論。
ここの主要な問題は、すでに 1870 年代にケーリーによって定式化され、およびジョルダンとヘルダーによって研究されていたが、与えられた位数のすべての有限群を見つけることだった。問題は難しすぎると判明し、数学者は特別なケースに向かった、ガロワの理論によって特に示唆されるような：すべての単純群またはすべての可解群を見つけるために（cf. 1963 年のファイト-トンプソン定理、1981 年のすべての有限単純群の分類)。[14]、[15]、[30]参照。
(b) 有限群からの有限性を持つ無限群への一定の結果の拡張。
例は、1928 年 O. J.シュミットによる、レマク-クルル-シュミットの定理の証明。 [5]参照。
(c) 群プレゼンテーション（組合せ群論)。
これは 1882 年フォン・ダイクにより開始され、デーン、ティーツェ、ニールセン、アルティン、シュライヤーと他の人々によって、20 世紀まで続いている。完全な説明のために[7]参照 。
(d) 無限可換群論。
この関連に重要なのは、1920 年代と 1930 年代のプリューファー、ベーア、ウルム、その他の人々の業績である。 [30]参照 。
(e) 群拡大 extension のシュライヤー理論（1926)。これは群のコホモロジーの導入を導いた。
(f) 代数群。ここでは、1940 年代のボレルとシュバレーの業績が目立つ。
(g) 群表現理論から連続群への拡張を含む位相（トポロジー）群。
突出した名前は、シュライヤー、E.カルタン、ポントリャーギン、ゲルファント、そしてフォン・ノイマン（1920 年代と 1930 年代)。[4]参照。
次のページの図は、様々な章で概説したことおよびこの章の最初に要約された、群論の展開の図表のスケッチである。